

パブロ・ネルーダのもうひとりの郵便配達屋

福嶋 伸洋

I 軍事政権下のメーデーに、若き労働組合長は

ブラジルの詩人カルロス・ドゥルモン・ヂ・アンドラーヂは、詩集『庶民のバラ』（1945年）を開く《詩をめぐる考察》で、チリの詩人パブロ・ネルーダの名前を、ヴィニシウス・ヂ・モライスやムリーロ・メンヂスといった同国の詩人、アポリネールやマヤコフスキーといった同時代の詩人の名前に並べている。『二十の愛の詩とひとつの絶望の歌』（24年）や『大地の棲みか』（33年）といった詩集ですでに世界的な名声を得ていたチリの詩人の名前がブラジル文学に現れたのは、マルセロ・フェラス・ヂ・パウラによれば、このときが最初だったという¹。ここで「どうだっていい」と言われる「道のまんなかの石」とは、伝統的な抒情詩を好む人びとから揶揄しつくされた、だがモダニズムの記念碑ともなったドゥルモンの詩篇《道のまんなかの石》に現れているものである。

道のまんなかの石も

足跡も どうだっていい。

これらがわたしの詩人たちだ。誇りのすべて

正確さのすべてをもって 入り込んだのだ

わたしの運命的な左側に。わたしはヴィニシウスから盗む

もっとも清澄な悲歌を。ムリーロに喉を潤す。

ネルーダよ わたしに与えてほしい

燃えさかるネクタイを。アポリネールに迷う。さらば マヤコフスキー。

彼らはみな わたしの兄弟であり 新聞ではないし

椿の花びらのあいだを滑りゆく 汽艇でもない。

わたしが投げた わたしの人生のすべてだ。²

これに先立つ詩集『世界の感情』（40年）では、「政治」から距離を取り「現実」に対し斜めに構えていたドゥルモンは、四五年の詩集では、それまでの姿勢をためらいなく棄て去り、にわかに「左」への加担を高らかに宣言している。それが、四〇年代に立て続けに起こった歴史的事件に心を動かされたためであることは疑いを容れないが、同時に、この《詩をめぐる考察》でみずから告白しているように、ドゥルモンがパブロ・ネルーダの

「闘争的な」詩に影響を受けたためでもあることは見逃せない。一九四二年九月三〇日、チリの詩人は旅先のキューバで《スターリングラードに捧げる新しい愛の歌》を朗読した。「わたしの声は 叩き潰されたきみ自身の壁にもたれて／死んだ 偉大な者たちとともにあった／わたしの声は響いた きみが死にゆくのを見ながら 鐘のように風のようにスターリングラードよ」……³。ドゥルモンの『庶民のバラ』に収められた《スターリングラードへの手紙》には、この詩の反響を聴き取ることができる。

詩は本からは逃げ出し いまや新聞のなかにある。
モスクワから届く電報は ホメロスの再話である。
だがホメロスはもう古い。それらの電報は新しい世界を歌う
暗闇のなかにいるわたしたちが 知らない世界を。
わたしたちはきみ 破壊された街のなかに それを探しに行った
きみの死せる だが屈してはいない街路の平穏のなかに
炸裂する爆弾の音よりもはげしい きみのあえぐ声のなかに
きみの冷たい 抵抗への意志のなかに。⁴

また同じ詩集に収められた《モスクワからの電報》でドゥルモンは、戦争で荒廃した街の再興をあまりにも純に願っているのではないとすれば、みずからの考えを証すために新聞にありふれた言葉で詩を組み立てようとしているように見える。

石に石を積み重ねて 街を再建しよう。
家また家で 大地は覆いつくされるだろう。
道また道に 行き交う人びとがまた現れるだろう。
鉄道駅の建設から
そして発電所の建設から わたしたちは始めよう。⁵

だが、ドゥルモンのこのような狭い意味での政治参加の時代は、長続きはしなかった。次の詩集『明白な謎』(51年)に、ポール・ヴァレリーの名とともに「出来事はわたしを退屈させる (Les événements m'ennuient.)」という題辞を掲げて、ドゥルモンは少なくとも見たところためらいなく、それまでの闘争的な姿勢をふたたび棄て去り、すべてを諦める老年の英知に、「すべての歴史は後悔である」という一行が言い尽くす悲観と虚無の境にたどりついた。とはいえ、ヴァギネル・カミーロによれば、このような政治参加からの離脱はドゥルモンひとりの問題ではなかく、マリオ・ヂ・アンドラーヂやマヌエル・バンデイラといった同時代の多くの知識人を巻き込んだものだった。

一九四七年、ドゥトラ政権のもとで共産党が非合法化され、翌四八年、共産党員から議員資格が剥奪されると、同じ年に開かれたブラジル作家連盟の第二回大会において共産党の代表団は、これに反対する動議への承認を得ようと、本来はこの提案を審議すべき政治問題委員会——ドゥルモンもそこに加わっていた——を飛ばして、強引に本会議に持ち込んだ。これに対する抗議の意を表すため、政治問題委員会の委員たちは集団棄権した。また、二年後の総会で行われた作家連盟内の選挙で、共産党員たちは、重要ではない職務に就くことを拒むため独自の候補者名簿を作成し、これがアフォンソ・アリーノスが作成した候補者名簿——ドゥルモンは第一書記候補になっていた——に敗れると乱闘騒ぎを起こし、これに抗議の意を表すため、アフォンソ・アリーノスの候補者たちはふたたび集団棄権した。この事件をめぐって、ドゥルモンの盟友でもある詩人マヌエル・バンデイラは、共産党員の詩人チアーゴ・ヂ・メロから受けたインタビューで次のように答えている。

わたしたちの国の共産党員を好意的に見ていたこともあった。彼らのひどい政策をまだ知らなかったんだ。だからわたしは役に立つ無知な者だった。警察の暴力への抗議文に署名したこともあった。共産党のパーティに誘われてパブロ・ネルーダへの歓迎文を読み上げたこともある。ネルーダとニコラス・ギジェンに頼まれてブラジル文学アカデミーに連れて行ってそこで彼らへの歓迎文を読み上げたこともある。

だがブラジル作家連盟での事件がわたしの目を開いたんだ。いまではわたしは彼らに罵られると同時に、多くの人びとに共産党員と取られてもいる。本当のところわたしは、ロシアかアメリカか、という恐るべき対立の二択を迫られるのを拒んでいる。共産主義の抑圧かアメリカ合衆国の帝国主義か、そのほかに救いの可能性がないとしたら、この世界が両者の水素爆弾の力で滅びてしまったほうがよいだろう。⁶

四〇年代末、ソヴィエトにおいてジダーノフの文化政策が党派的なものになってゆくのに呼応する形で、厳しい状況に置かれたブラジル共産党の方針もしだいに狭隘なものになり、それにつれて知識人、芸術家たちは共産党から遠ざかっていく⁷。また、このようなブラジル共産党への失望が生じる以前、四〇年代にモスクワ裁判の議事録が公になったとき、ブラジルの知識人たちは一様にソヴィエトの共産主義、スターリン体制への不信を強くしたという。ヴァギネル・カミーロは、ドゥルモンもそのなかにいた当時の雰囲気、批評家アントニオ・カンヂドの次のような回想によって伝えようとしている。

モスクワ裁判の議事録を見て受けた印象を覚えている。資本主義大国に仕える裏切り者だったと「告白」する一九一七年の革命家たち、ブハーリン、ジノヴィエフ、カーメネフ、ラデク、ピアタコフや他の人びとたちの発言を読んだときわたしは石のように固まってしまっ

たんだ！ 歴史上もっとも悲劇的でもっとも下劣な茶番だった。モスクワ裁判はパウロ・エミールリオにとって政治的立場を変える決定因になり、彼を通じてわたしたちの何人かにとってもそうだった。当時わたしが知り合った若者たちは似たような経験をしていた。⁸

ドゥルモンもまた、アーサー・ケストラーの小説『真昼の暗黒』（40年）との出会いをきっかけに、ナチズムの蛮行と同じものが東側にもあったことを知ったという。ドゥルモンは、ブラジルの同世代の書き手たちと同じように、広い意味での「政治」意識を棄てることはなかったが、ネルーダが書き続けたような表立って闘争的な作品は、以後書かなくなる。七〇年代、みずからを「政治的な詩人」と見られることを好まなかったヴィニシウス・ヂ・モライスは、おそらく『庶民のバラ』のドゥルモンを思い浮かべつつ、——この偉大な友人に対しては稀なことだったが——詩人を次のように揶揄したことがある。「わたしはドゥルモンのような真似はしない。家に共産主義者たちの詩を持ち帰って、きれいに見えるように直すなんて。わたしは共産主義者の直し屋じゃないからね」。さらに、「政治的な詩はたくさん書いたけど、あとでみんな破り捨てた。真実なんて何もなくて、作り物だけだった」⁹。いくつかの事実明らかに反して、なぜか自分をことさらに政治音痴の詩人と見せたがる傾きがあったヴィニシウスはしかし、一九五五年、外交官として滞在していたパリで、工事現場の慎ましい労働者を讃える次のような詩行から始まる一篇のまぎれもない「政治的な詩」を書き上げている。

地面しかなかったところに
家々を築くのは 彼だった。
翼のない鳥のように
彼は昇る 手から花開いてゆく
家々とともに。
みずからの偉大なる使命のことは
何も知らなかった。
知らなかった たとえば
人間の家が 神殿であるということ
宗教なき神殿であるということ
また 知らなかった
彼が作る家が
彼の自由であり
彼の奴隷状態だということ。¹⁰

ヴィニシウスは、死の前年に当たる一九七九年の五月一日、サンパウロ州サン・ベルナルド・ド・カンポ市会館で行われた鉄鉱労働組合の集会で、この詩《建設現場の労働者》を朗読する。ジョアン・フィグレド大統領在任中の「民主主義への緩やかな移行」の時期に当たるとはいえ、十余年続いていた軍事政権下にヴィニシウスにこの依頼を取ってしたのは、このときの鉄鉱労働者組合長ルイス・イナシオ・ルラ・ダ・シルヴァである。翌年には労働党を設立し、ストライキを指揮して逮捕、投獄されるこの左翼活動家が、「大卒の学位を持たない」、「まともなポルトガル語を話せない」ブラジル大統領になったのは、およそ四半世紀のち、二〇〇三年のことだった。

II 歌うヴィニシウスの傍らで、チリの詩人は

一九七四年、ヴィニシウスは、ネルーダとの折々の思い出を綴った二十篇の詩からなる詩集『パブロ・ネルーダの自然史——遠くから来る悲歌』を刊行する。七三年九月の、チリのサルバドル・アジェンデ大統領の死、それに引き続いたネルーダの死が、ヴィニシウスのようにチリ大統領と社会主義の大義に共感していた人びとに大きな衝撃を与えたと、当時ブラジルの軍事政権の手を逃れてサンティアゴに亡命していたブラジルの詩人フェレイラ・グラールは伝えている。「軍部によるクーデタの十二日後に起こったネルーダの死は、わたしの想像では、ヴィニシウスを涙に暮れさせ、あの兄弟殺しの戦いのさなかに倒れた同志を抱きしめたいという気持ちにさせたことだろう。この本の発想は、怒りに満ちたプロテストというよりは、喪失感の表現であり、それを埋め合わせるかもしれない手段、去ってしまった友の現前を回復する手段である」¹¹。

ネルーダが七三年、死の直前に刊行した自伝には、数度のブラジル滞中のいくつかの出来事についての記述はあるものの、細に渡るものではないため、ヴィニシウスの『パブロ・ネルーダの自然史』に収められた二十の詩篇は、ネルーダのブラジル経験の貴重な記録として読むことができる。同時にそこには、ブラジルが儂い幸福を生きた時代のボサノヴァの詩人としての像、また、軍事独裁の圧政が烈しさを増してゆく七〇年代のブラジルでは、国外に亡命して声高にプロテストを行ったカエターノ・ヴェローゾ、ジルベルト・ジル、シコ・ブアルキといった歌手、フェレイラ・グラールのような詩人の陰に隠れることになった「簡単な」詩人としての像からはやや離れたヴィニシウスの俤を見て取ることもできる。

たとえば最初に置かれた詩篇《ロサンジェルス、一九四八年》は、次のように締めくくられている。

今日 世界はかつてない勢いで進んでいる
いまだ囚われたままの 暁に向かって
その暁を詩で救うことを ともに試みよう
詩のひとつひとつが手榴弾となる
きみがかつて《スターリングラードに捧げる愛の歌》に残した
不滅の言葉にあるとおり。¹²

ノーヴァ・アギラル社が一九六八年に初版を出したヴィニシウス詩作品集には収められていない、『パブロ・ネルーダの自然史』にのみ見出されるこの詩篇が、正確にいつ書かれたものなのか見定めるのはむずかしいが、題に示されている年に結びつけてよいものとするれば、一九四八年の時点では、ヴィニシウスは「共産主義者たちの詩」によく似た詩を書いていたと言うことができる。「政治的な詩はたくさん書いたけど、あとでみんな破り捨てた」というヴィニシウスののちの言葉に偽りがないとすれば、この紙屑は二十五年に渡って取っておかれたのだろうか。

ヴィニシウスがネルーダの親しい友人だったということはブラジルではよく知られているが、——友情と呼ばれるものが得てしてそうであるように——チリではあまり知られていないかもしれない。一九六〇年三月、南半球の初秋、ソヴィエトに向かおうとしていたチリの詩人はモンテビデオで、リオデジャネイロに帰ろうとしていたブラジルの詩人と偶然出会い、ともにルイ・リュミエール号での船旅に出た。ふたりの詩人が、モエ・エ・シャンドンを開け、詩を思い付いては午後に誰もいないデッキで書き留め、夜には金持ちのブルジョワの愚かな人生を笑って過ごした、「春のワイン……秋のワイン／同志たちよ秋の落ち葉の降りかかる／テーブルを囲もう／そこでは 世界の大きな流れは／わずかに色褪せる／わたしたちの歌声から 遠く」¹³というネルーダの詩行さながらの四日間の旅のあいだに、ヴィニシウスとネルーダはソネットを捧げあった。この二篇の手稿は『パブロ・ネルーダの自然史』に収められている。

「遠くからやってきた兄弟」のようなヴィニシウスの陽気さ、活力を讃えるネルーダの詩は、次の三行で締めくくられている。

過去からきみは学んだ 未来になることを
そしてわたしは若返った というのもある純なる日
きみの手から オルフェウスが生まれるのを見たから¹⁴

ヴィニシウスの戯曲『オルフェウ・ダ・コンセイサオン』（56年）と、これにもとづい

て作られたマルセル・カミュ監督の映画『黒いオルフェ』(59年)を、ネルーダはともに知っていたらどうか。「過去からきみは学んだ 未来になることを」、また「きみの手からオルフェウスが生まれるのを見た」という詩行は、ギリシアの伝説の舞台をヴィニシウスが現代のリオデジャネイロに移したことを指している。「そしてわたしは若返った」という一文は、ヴィニシウスが『オルフェウ・ダ・コンセイサオン』の冒頭に、ネルーダの次の詩行を題辞として引用していたことへの謝意を込めた目くばせのようにも見える。「パンもなく音楽もなく／混乱した孤独へと落ちゆき／そこでオルフェウスが持つのは／魂のためのギターのみ／リボンとひびとで／覆われたギター／そして人びとの上で歌う／貧しさの鳥のように」¹⁵。

いっぽう、ヴィニシウスがネルーダに捧げたソネットでは、「大なる歌」の「大いなる歌い手」——ネルーダの代表作『大いなる歌』(1950年)への仄めかし——の偉大さが讃えられると同時に、みずからを「小なる歌」の詩人、「鈍重な獣」と呼ぶ謙虚さが示されながらも、チリの詩人とブラジルの詩人、ふたりが兄弟愛で結びつけられていること——とりわけ、「ともに歩まなかった」数々の道、ともに歩むことがありえたかもしれない、夢見られただけの数々の道によって結びつけられていること——が力説されている。その声調は、思いがけない出会いと、初秋の南大西洋上で開けられた何本ものシャンパーニュとがもたらした陶酔を感じさせるものではあるが、明晰さは犠牲になってはいない。

どれほどの道を わたしたちはともに歩まなかったか
ネルーダ わが兄 わが同志よ……
だがこの突然の出会いには 数多くの出会いのなかでも
もっとも美しく もっとも真なるものではなかったか？

大なる歌と 小なる歌——ふたつの歌が
いま 南十字星の下に響く
そしてその歌の奥にあるのは チリの男とブラジルの男の
怒りと悲しみ

そして愛——わたしたちがいま見出した愛……
だからこそ わたしたちの花束が取り交わされるこのときに
わたしはきみ 大いなる歌い手を さらに誉め讃える

というのも 鈍重な獣であるわたしよりも
きみはしかし高く羽ばたき より高らかに響かせるからだ

ブラジルでは、ヴィニシウスやパウロ・メンデス・カンポス、また前出のチアーゴ・ヂ・メロ——ネルーダのポルトガル語訳者であり、ネルーダは彼の三篇の詩をスペイン語に訳しているが、文学史からは忘れ去られている——といった詩人は、つねにまじりけない賛意を込めてこのチリの詩人の名前に触れていたことを、フェラス・ヂ・パウラは指摘している。「実際、敢えて言えば、ブラジル詩にとってのネルーダの像は、文学形式の面で模倣すべきモデルのそれというより、ひとりの人物、ひとつのテーマの像というものに遙かに近い」と書いている。闘士の役を担うことで、詩人の理想像として存在感を示していたネルーダは、「優れた芸術家としての名声、認知、この時代の政治参加したあらゆる作家たちが切望していた庶民にまで渡る広い読者、闘士としての像」のために、「庶民の詩、社会に訴える詩の探求と、より洗練された芸術技法の探求とのあいだで揺れていた」ブラジルの詩人たちにとって、鏡のような存在になったのだという¹⁷。

崇拜していたと言っても過言ではないこのチリの詩人から、ヴィニシウスは、忘れえない言葉を受け取ったことがある。この挿話を書き留めたジョゼ・カステーロは七〇年代初めのこととしているが、実際にはおそらくネルーダが、リオ、サンパウロ、ベロオリゾンチ、オウロプレートといったブラジルの諸都市を周遊した六八年九月、サンパウロの近代美術館でヴィニシウスとともに著書へのサイン会を行った折りのことだったのではないかと思われる。

七〇年代の初め、チリ人のパブロ・ネルーダはサンパウロを訪れ、ヴィニシウスと昼食をともにした。証人としてルーベン・ブラーガとトキーニョがいる。何杯か飲んだあとで、トキーニョがギターでヴィニシウスの伴奏を始めた。ネルーダは堰を切ったような真摯さで告白した。「わたしにはヴィニシウスの勇気はなかった。わたしがいちばん作ってみたかったものがこれ、歌詞だった。だがばかにされるのが恐かったんだ」。ヴィニシウスは感動を隠すことができなかった。それまでつねにパブロ・ネルーダが現代に生きるもっとも偉大な詩人だと思ってきたからだった。¹⁸

III リオの冬の日、自由を得たばかりの共産党指導者は

ジェットーリオ・ヴァルガス大統領の^{エスタド・ノーヴォ}新国家が終焉を迎えて、長年に渡って投獄されていたブラジル共産党の指導者ルイス・カルロス・プレスチスに恩赦が与えられ、サンパウロのパカエンブー・スタジアムでその解放記念式典が行われたとき、バイーア州生ま

れの共産党員の小説家ジョルジ・アマードに招かれて、パブロ・ネルーダははじめてブラジルを訪れた。四十一歳になったばかりの、一九四五年七月のことだった。このときのことをネルーダは回想録で次のように書いている。

サンパウロのパカエンブー・スタジアムを埋め尽くす群衆を見てわたしは驚いてしまった。十三万を越える人がいたという。その広大な円のなかで彼らの頭はとても小さく見えた。隣にいた小柄なプレスチスはこの機会のためにこぎれいに着飾っていたが、わたしには墓から蘇ってきたラザロのように見えた。彼は細く肌が透けて見えそうなほど白かった。囚人特有のあの白さである。彼の強いまなざし、彼の眼下の紫色の円、彼のきわめて繊細な見た目、彼の荘重さ、それらすべてが彼の人生がいかなる犠牲であったかを物語っていた。だが彼は勝利のあとの将軍のように静かに話した。

わたしは数時間前に書いた彼を讃える詩を朗読した。ジョルジ・アマードはスペイン語の「albañiles（レンガ積み職人）」をポルトガル語の「pedreiros」に変えただけだった。わたしの怖れに反して、群衆はスペイン語で読まれた詩を理解した。わたしがゆっくりと一行ずつ読むと、ブラジル人たちの拍手が爆発するように轟いた。この拍手はわたしの詩に深い反響を残した。十三万人を前にして自分の詩を読む詩人は、その経験のあとでは同じ人間でいることはできないし、それまでと同じように書くこともできない。¹⁹

ネルーダがこのとき読んだ詩はのちに《パカエンブーでの言葉》という題で『大いなる歌』に収録されている。「どれだけのことをわたしは語りたかったことか ブラジル人たちよ／どれだけの歴史 戦い 誤解 勝利を／あながたがたに語るために 何年にも渡って心に担いできたことか」²⁰と始まるこの詩は、解放の戦いのためにラテンアメリカ諸国に連帯することを訴え、「わたしは言おう きみは憎しみを抱いてはいないと／きみが望むのは 祖国が生きてほしいということのみ。／そして自由が ブラジルの底から育てほしいということ／永遠の木のように」と希望を託す——ネルーダの他の数多くの詩とテーマを分かち合う——ものである。

『大いなる歌』では、この詩の前後に置かれた《ブラジルのプレスチス》と《ふたたび暴君たちが》という二篇の詩が、プレスチスの名前に言及している。前者は、「十一年間 彼らはプレスチスを／鉄の柵の後ろに閉じ込めた／死の沈黙のなかに／彼を殺す勇氣はなく。／人びとには何の知らせも届かなかった。／暴政はプレスチスの名前を／その黒い世界のなかで消した」²¹と、ブラジルの共産党弾圧の歴史を語り、後者は、「わが国民はわたしの歩む道を隠し／わたしの詩行を その手で覆い隠し／わたしを死から救った／ブラジルでは 人びとの／無限の扉が閉じる／プレスチスがふたたび／悪しきものを拒

むところで」²²と、四〇年代末にふたたび不穏さをましてゆくチリやブラジル、南アメリカ全体の状況を案じている。

党の指導者プレスチスに対するネルーダの熱い期待に反して、かつ、ネルーダがのちに懸念したように、ブラジルの知識人たちが、共産党が苦境に立たされたまさにこの時期に、ブラジル共産党から、またソヴィエトに代表されていた共産主義から遠ざかっていくのは、わたしたちがすでに見たとおりである。同じ共産党員であるという狭い意味でもネルーダの「同志」だった小説家ジョルジ・アマード——ルイス・カルロス・プレスチスを主人公に据えた小説『希望の騎士』の著者でもある——でさえ、バンデイラやドゥルモンが抱いたのと同じ不信を抱いたか、それに近い疑念に苛まれていたことを、一九五一年、アマードとともに中国に旅行していたネルーダは証言している。アマードは実際に、五八年の小説『ガブリエラ、丁字と肉桂』で、それまでにプロレタリア小説『カカオ』（33年）や政治小説『自由の地下の人びと』（54年）などで築いてきたみずからの文学世界を棄て去ることになる。

スターリン時代について明らかになったいくつかの事実は、ジョルジ・アマードの気力を挫いてしまった。わたしたちは古い友人であり、亡命の年月をともに過ごし、共通の信念と希望によってずっと結びつけられてきた。だが、わたしは彼ほど党派的ではなかったと思う。わたしの本性、わたしのチリ人気質が、他者への理解へとわたしを差し向けたのだ。いっばうジョルジは、いつも頑なだった。彼の師であるルイス・カルロス・プレスチスは人生の十五年近くを監獄のなかで過ごした。忘れられないこのようなことが精神を固くしてしまったのだ。わたしはジョルジの党派主義を、分かち合うことなく、自分自身に納得させた。²³

一九四五年七月、ネルーダはリオデジャネイロで、サンパウロのパカエンブー・スタジアムで行われた記念式典の熱狂も醒めやらぬうち、自由を得たばかりの、彼が強い連帯を望んでいたこのブラジル共産党の指導者に対し、とんだ失態を犯してしまう。はたからは、奇行で鳴らしたネルーダにとっては些細なすっぱかしのようにも見えるが、長々しい言い訳を回想録にまで書き残しているところを見ると、このときの悔いはけっして小さくなかったようだ。

翌週のある日、プレスチスはわたしを昼食に誘ってくれた。そのとき、運命のせいにするかわたしの無責任さのせいにするかしかない、あの災難のひとつが降りかかった。ポルトガル語には土曜日サバドと日曜日ドミンゴはあるが、一週間の他の日については月曜日ルネス、火曜日マルテス、水曜日ミエルコレスなどと言わず、第二日セグンダフェイラ、第三日テルサフェイラ、第四日クアルタフェイラなどという悪魔めいた名前で呼び、しかも第一日フェイラは飛ばしてしまう。わたしはそれらのフェイラにすっかり混乱してしまい、きょうが

何曜日なのかまったくわからなくなる。

わたしは美しいブラジル人の女友達とビーチで数時間を過ごしに行ったが、翌日にプレスチスが昼食の席を設けていることはつねに心に掛けていた。プレスチスが^{テルサフェイラ}火曜日にテーブルを整え、わたしがイパネマのビーチで数時間ただらしているあいだずっと待ち惚けていたことに、わたしは^{クアルタフェイラ}水曜日に気付いた。彼はあちこちわたしを探し回ったが、誰もわたしの居所を知らなかった。この禁欲的な指導者は、わたしの特異な好みに敬意を表して、ブラジルでは手に入れるのが困難なすばらしいワインを注文してくれていた。わたしたちはふたりきりで昼食を取るはずだった。

この話を思い出すといつもわたしは恥ずかしくて死にそうになる。わたしは人生のなかであらゆることを学ぶことができたが、ポルトガル語の曜日の名前だけは学ばなかった。²⁴

ポルトガル語の初学者が言い出しそうな曜日名へのこの不平を、ドリヴァル・カイーミ——バイア生まれで当時はリオに住んでいた音楽家で、ヴィニシウスや、同郷のジョルジ・アマードの盟友でもある——も聞いている。カイーミの伝記を書いた妻ステラ・カイーミは六六年のこととしているが、この年にチリの詩人がブラジルを訪れたという記録は見当たらないので、あるいは六八年九月のことだったのかもしれない。いずれにせよステラ・カイーミはここに、ネルーダが六〇年代末にバンデイラやドゥルモンに会っていたという貴重な証言を残している（筆者のこの推測どおりだとすれば、バンデイラは翌月、六八年十月に八十二歳で死ぬことになるが）。

ゼリアとジョルジ・アマードはリオに行き、当時は法的自由を享受していたルイス・カルロス・プレスチスが共産党から上院への選挙に打って出る際の運動に参加するためブラジルに来ていたチリ人作家のパブロ・ネルーダを迎えた。そのときカイーミは、この偉大な詩人にサインをもらう機会を逸していた。二十一年後になって初めてその望みを叶えることができた。一九六六年、ルーベン・ブラーガの家滞在中にいたネルーダにカイーミがふたたび会ったときのことだった。カイーミは好機を逃そうとはしなかった。輝かしいサインをもらうために、セルバンテス著『ドン・キホーテ』の自分の本を取りに家に戻った。その本にはすでに、やはりルーベン・ブラーガの家で詩人マリオ・キンターナを囲む昼食の折りにもらったブラジル詩の偉人たちのサインがしてあった。カイーミは狂喜した。というのも同じ居間にマヌエル・バンデイラ、カルロス・ドゥルモン・ヂ・アンドラーヂ、ヴィニシウス・ヂ・モライス、パウロ・メンヂス・カンポスらがいたからである。「今後はわたしの『ドン・キホーテ』を自分の名前で汚すことさえしない」とカイーミは大げさに言った。カイーミはまたネルーダが彼にした告白も覚えている。「ポルトガル語で曜日を「セグンダフェイラ、テルサフェイラ、クアルタフェイラ……」とかというふうに「フェイラ」と言うのは好きじゃないんだ」。²⁵

カイミがネルーダのこの告白を聞いたのは、四五年のあのすっぽかしの直後のことだったろうか、六八年のことだったろうか、いずれにせよ、なぜこの詩人がポルトガル語の曜日名などという些細なものにこだわるのかまでは聞かなかったようだ。長い獄中生活を終えたばかりでまだ貧弱な四十七歳のルイス・カルロス・プレスチスが、最高級のワインを注文して昼食を整え、待ち惚けているあいだ、四十一歳のパブロ・ネルーダはイパネマのビーチでたらたらと陽に当たりながら、「美しいブラジル人の女友達 *una bella amiga brasileña*」や、他の男友達といっしょにブラジル産のエビ——並べて串に刺して炙り、ライムを絞りかけて食べるもの——と、詩人がフランス産よりも好むチリ産のワインとを味わっていたのかもしれない。ヴィニシウス・ヂ・モライスの『パブロ・ネルーダの自然史』に収められた《ブラジルへの初めての旅 リオ、一九四五年》と題された詩にも、この折りのことが記されている。ネルーダは「美しい女友達」とふたりきりで出かけたことを強調しているが、ヴィニシウスの詩に嘘がないとすれば、この初めてのリオ滞在でもネルーダは、ヴィニシウスやジョルジ・アマードといった男友達に出かけることのほうが多かったようにも思われる。

リオで

わたしたちはエビを食べていた。

「みんなエビだ」ときみは言った 好きなのは
オリーブオイルをつけて炙ったもの きみが好きな
チリ産のワインを（「フランス産より
うまいぞ！」）きんきんに冷やして飲みながら
ふたつの祖国を混ぜて
ひとつの花束を作るように。

[…]

わたしたちは海の幸を食べた。
カクテルと ビールと 兄弟同士の
優しさとともに コパカバーナの
強い陽差しに 汗を流しながら
時間をつぶすための 異教の神殿を成す
胸 まなざし 尻のただなかで²⁶

四〇〇頁を越えるネルーダの回想録『わが生涯の告白』のなかで、ヴィニシウスらしい人物の姿、というか影が見えるのは、しかし、この一箇所のみである。一九七四年、当時のチリでは発禁だったためメキシコとアルゼンチンで出版されたこの回想録を手にとっ

たヴィニシウス・ヂ・モライス「Moraes, Vinicius de」が、巻末に付された索引のページを開いたとき、「Moore, Marianne」「Mora, Constancia de la」のあとに「Morante, Elsa」「Moravia, Alberto」と続いているのを見て何を感じたかは——ヴィニシウスのネルーダへの愛の深さを知る者にはまざまざと思い浮かぶようではあるが——知られてはいない。

IV ネルーダの死を悼む夜、政治音痴の詩人は

『パブロ・ネルーダの自然史』に収められた二〇篇の詩のうち、語られている挿話の年代が特定できるものを並べ替えてみると、ヴィニシウスとネルーダの交流の、またネルーダのブラジル経験の、次のような——チリの詩人の回想録からはたどれない——年譜を再構成することができる。一九四五年、ネルーダはプレスチスの解放記念式典に参加するため、ブラジルを初めて訪問する。一九四九年、メキシコで足を悪くして入院したネルーダは、当時ロサンジェルスに滞在していたヴィニシウスを自分のもとに呼びつける。一九五七年、ふたりはパリでルイ・アラゴンやニコラス・ギジェンらとともに過ごす。一九六〇年、モンテビデオから同じ船に乗り込み、リオで数日をともに過ごしたあと、ネルーダはソヴィエトへと旅立つ。一九六六年、リオからサンパウロや、ミナスジェライス州の古都へ旅行する。……

空気や愛、本や詩、たまねぎやパン、春や冬といったありふれたもの^{エレメンタル}をあたかも英雄のように讃えるオードを集めた一九五四年の詩集『ありふれたオード集』には、《リオデジャネイロへのオード》という題の一篇も収められている。この詩集についてネルーダは次のように語っている。「わたしは、すでに歌われ、繰りかえし語られたたくさんの物々を描き直したかった。わたしが心がける出発点は、鉛筆をなめながら太陽や黒板や時計や家族についての宿題の作文に取りかかる少年のそれでなければならなかった。どんなテーマもわたしの領域から逃れることはできなかった。表現を最高の透明さ、純潔さに従わせつつ、歩いたり飛んだりしながらわたしはあらゆるものに触れなければならなかった」²⁷。それゆえ、ブラジルがその美しさを世界に誇る——当時はまだ首都だった——リオデジャネイロの街は、世界を形づくる基本的なもの^{エレメンタル}とネルーダに認められるという榮譽を受けた、と言ってよいだろう（リオの他にオードの題材になっている街はバルパライソだけである）。おそらく一九四九年の滞在で受けた印象にもとづいて書かれたと推測されるこの詩は、ヴィニシウスの詩《ブラジルへの初めての旅》の裏面を成すもの——あるいは逆——と見なせるかもしれない。

リオデジャネイロ 水は

きみの旗
きみの色をかきみだす
息を吹きかけ 風のなかで響く
黒い水の精である
街
果てしない明るさと
煮えたぎる暗がりと
石と泡とが
きみを織り成す
きみの海のハンモックの
明晰な揺れ
砂でできたきみの足の
青い動き
きみの目の
火の灯された枝。²⁸

リオデジャネイロの風景の美しさを大胆な筆づかいで描き出すようにオードを始めたネルーダの目はしかし、ヴィニシウスが見せたがっていただろうこの大都市のよそゆきの顔ばかり見ていたわけではなく、ヴィニシウスの目が敢えて見逃そうとする、豊かさに混在する貧しさの問題を力強く捉え、苦みを含ませながら、なおも微かな希望を込めて詩を終えている。

いつか
きみの光の冠の
輝きのなかで
黒人が 白人が
きみの土地に棲み きみの血を継ぐ 子どもが
きみの美しさの尊厳の高みにまで
引き上げられ
きみのまばゆい光のなか 平等になり
慎ましく 誇り高く
空間と よろこびとを
手にするのを
わたしが見届けるとき
そのとき リオデジャネイロよ

いつか
いつの日か
何人かにだけでなく
きみのすべての子どもたちに
きみの微笑みを
小麦色の水の精の泡を 与えるとき
そのとき
わたしはきみの詩人になるだろう
豎琴を持って
きみの香りを歌うだろう
わたしは眠るだろう
きみのプラチナのリボンの上で
並ぶものがない
きみの砂浜で
わたしの夢のなかで
大きな
海の蝶の羽根のように開く
扇の青い爽やかさのなかで。²⁹

ヴィニシウスの《ブラジルへの初めての旅》とネルーダの《リオデジャネイロへのオード》と並べてみると、ヴィニシウスの詩が仮にネルーダに何らかの共鳴を起こしていたとしても、それは微かな反響に留まったように思われるが、逆にネルーダの詩は、ヴィニシウスに大きな共鳴を起こし続けていた。ネルーダのこの『ありふれたオード集』には、一九四五年の広島への原爆投下に触れた《原子へのオード》と題された詩が収められている。

ごくごく小さな
星
きみは
永遠に
金属のなかに
埋もれているようだった。
きみの
悪魔の火を
隠したまま。

ある日
その小さな扉を
叩く者があった。
人間だった。
[…]
それから
兵士が
防弾チョッキにきみを入れた
まるで
アメリカ製の
丸薬か何かのように
そして世界を旅して
きみを落とした
広島に。
[…]
街は
最後の胞に至るまで 破壊され
突然 崩れ落ちた
なぎ倒され
腐敗し
人びとは 突然に
レプラを患う者ようになった
子どもたちの
手を取った
そして小さな手は
その手のなかで力をなくした。³⁰

一九七三年、ヴィニシウスは《広島のバラ》という題の詩を書く。ヴォーカルグループ、セコス・イ・モリヤードスのジェルソン・コンハードが曲を付け、同年にリリースされたグループのアルバムに収録された。ボサノヴァ以後、ブラジル音楽の主流がカエターノ・ヴェローゾやジルベルト・ジルらのトロピカーリアから、ロックに至る時期を徴づけるものであり、軍政へのプロテストの色合いの濃い複数の歌を収録していたこのアルバムは、一九六九年の軍政令5号によって検閲が大々的に行われるようになり、息苦しさを増していたブラジルで、政治参加の表現として多くの聴衆を得た。パウル・ツェランの《誰のものででもないバラ》さえ連想させるこの詩の主題からすると、ネイ・マトグロッソのファル

セットが乗るジェルソン・コンハートの旋律は甘すぎるが、それがまさにあくまでも大衆的なものとしてのみ政治を扱うというヴィニシウスの思惑だったと取ることもできる。

黙した 遠くに想いを投げる
子どもたちを思え
盲いた 不正確な
少女たちを思え
腐敗し 変えられた
女たちを思え
朽ちたバラのような
傷を思え
だが 忘れるな
バラを バラを
広島をバラを
伝わりゆくバラ
放射能のバラ
愚かな 体の効かないバラ
硬変をとまなうバラ
バラに反する 原子のバラ
色もなく 香りもなく
バラもなく 何もない バラを³¹

広島への原爆投下から三十年近くが経とうとしていたこの時期にヴィニシウスがなぜこの主題を取り上げたのか、たとえば、同じ時期に世界に広まっていた反戦運動に共感していたから、といった推測はできるとしても、確かなところはわからない。ネルーダの死の年、ヴィニシウスは、歌手・ギタリストのトキーニョ、女性ヴォーカルグループのクアルテート・エン・シーとともにいったサンパウロでのショーで、自作の『パブロ・ネルーダの自然史』から数篇の詩を朗読し、友の死を悼んだ。このとき撮られた写真にヴィニシウスは、共演メンバーに囲まれながら、ゲリラ戦の兵士のような——その名高い日記で詩人ではただひとりパブロ・ネルーダの名前を挙げているキューバ生まれのゲリラ隊長を思わせる——いでたちで現れている〔図1〕。チリの作家アントニオ・スカルメタの小説『燃える忍耐』（86年）にもとづいて作られたマイケル・ラドフォード監督の映画『イル・ポスティエーノ』（94年）で、イタリアの小さな島に亡命してきたパブロ・ネルーダに手紙を届け、親交を深めてその詩と思想にのめりこんでいった若き郵便配達屋は、ネルーダが島

から去ったあと、みずからが正しいと信じるものための戦いに出た。軍事政権があらゆる芸術家、あらゆる人びとに沈黙を強いた時代、みずからを政治音痴に見せたがっていたボサノヴァの詩人がネルーダの死を悼む夜に選んだ服装は、実戦に役立つことはなかったとしても、ヴィニシウスがパブロ・ネルーダのもうひとりの「郵便配達屋」だったことを、あるいは、彼の言葉に代わって語っているかもしれない。

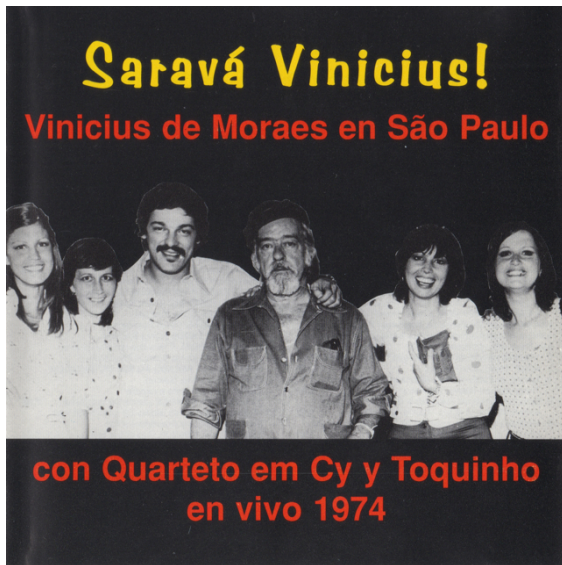


図1 サンパウロで1974年に行われたライブを収録したアルバム

注

¹ Marcelo Ferraz de Paula, "Neruda no Brasil; o Brasil em Neruda" in: *Caderno de Letras da UFF*, no. 38, 2009.

² Carlos Drummond de Andrade, *Poesia completa*, Rio de Janeiro, Nova Aguilar, 2002, p. 115.

³ Pablo Neruda, *Obras Completas*, vol. I, Barcelona, Galaxia Gutemberg / Círculo de Lectores, 1999, p. 396.

⁴ Carlos Drummond de Andrade, *Poesia completa*, p. 201.

⁵ *Ibid.*, p. 202.

⁶ Manuel Bandeira, "Perdi a fé e a esperança no Brasil", entrevista a Thiago de Melo, in: *Comício*, 1:23, Rio de Janeiro, 17 out. 1952. *Apud*. Vagner Camilo, *Drummond - da Rosa do Povo à rosa das trevas*, Cotia, Ateliê Editorial, 2001, p. 65.

⁷ Augusto Buonicore, "Comunistas, cultura e intelectuais entre os anos de 1940 e 1950", in: *Revista Espaço Acadêmico*, no. 32, jan. 2004.

⁸ Vagner Camilo, *Op. cit.*, p. 67.

⁹ José Castello, *O poeta da paixão - Vinicius de Moraes: uma biografia*, São Paulo, Companhia das Letras, 1994, p. 355.

- ¹⁰ Vinicius de Moraes, *Poesia completa e prosa*, organização por Alexei Bueno, Rio de Janeiro, Nova Aguilar, 1998, p. 411.
- ¹¹ Ferreira Gullar, "Entre irmãos", apresentação de: Vinicius de Moraes, *História natural de Pablo Neruda - elegía que vem de longe*, São Paulo, Companhia das Letras, 2006, pp. 7-8.
- ¹² Vinicius de Moraes, *História natural de Pablo Neruda*, p. 23.
- ¹³ Pablo Neruda, *Obras completas*, vol. I, p. 827.
- ¹⁴ Vinicius de Moraes, *História natural de Pablo Neruda*, p. 15.
- ¹⁵ Vinicius de Moraes, *Poesia completa e prosa*, p. 1394.
- ¹⁶ Vinicius de Moraes, *História natural de Pablo Neruda*, p. 17.
- ¹⁷ Marcelo Ferraz da Paula, *Op. cit.*, p. 188.
- ¹⁸ José Castello, *Op. cit.*, p. 296.
- ¹⁹ Pablo Neruda, *Confieso que he vivido: memórias*, Santiago, Pehuén, 2005, p. 423. (パプロ・ネルーダ『ネルーダ回想録 わが生涯の告白』本川誠二訳、三笠書房、一九七六年、三四一頁。)
- ²⁰ Pablo Neruda, *Obras completas*, vol. I, p. 560.
- ²¹ *Ibid.*, p. 559.
- ²² *Ibid.*, p. 563.
- ²³ Pablo Neruda, *Confieso que he vivido: memórias*, p. 322. (ネルーダ『ネルーダ回想録』二五七—八頁。)
- ²⁴ *Ibid.*, p. 424-5.
- ²⁵ Stella Caymi, *Dorival Caymmi - o mar e o tempo*, São Paulo, Editora 34, 2001, p. 236-7.
- ²⁶ Vinicius de Moraes, *História natural de Pablo Neruda*, p. 33.
- ²⁷ Pablo Neruda, *Confieso que he vivido*, p. 400. (ネルーダ『ネルーダ回想録』三二二頁。)
- ²⁸ Pablo Neruda, *Obras completas*, vol. II, Barcelona, Galaxia Gutemberg / Círculo de lectores, 1999, p. 212.
- ²⁹ *Ibid.*, pp. 216-7.
- ³⁰ *Ibid.*, pp. 60-1.
- ³¹ Vinicius de Moraes, *Livro de letras*, São Paulo, Companhia das Letras, 2006, p. 160.

参考文献

- ANDRADE, Carlos Drummond de, *Poesia completa*, Rio de Janeiro, Nova Aguilar, 2002
- BANDEIRA, Manuel, "Perdi a fé e a esperança no Brasil", entrevista a Thiago de Melo, in: *Comício*, 1:23, Rio de Janeiro, 17 out. 1952
- BUONICORE, Augusto, "Comunistas, cultura e intelectuais entre os anos de 1940 e 1950", in: *Revista Espaço Acadêmico*, no. 32, jan. 2004
- CAMILO, Vagner, *Drummond - da Rosa do Povo à rosa das trevas*, Cotia, Ateliê Editorial, 2001
- CASTELLO, José, *O poeta da paixão - Vinicius de Moraes: uma biografia*, São Paulo, Companhia das Letras, 1994
- CAYMMI, Stella, *Dorival Caymmi - o mar e o tempo*, São Paulo, Editora 34, 2001
- GULLAR, Ferreira, "Entre irmãos", apresentação de: Vinicius de Moraes, *História natural de Pablo Neruda*.
- MORAES, Vinicius de, *Livro de letras*, São Paulo, Companhia das Letras, 2006
- MORAES, Vinicius de, *História natural de Pablo Neruda - elegía que vem de longe*, São Paulo, Companhia das Letras, 2006
- MORAES, Vinicius de, *Poesia completa e prosa*, organização por Alexei Bueno, Rio de Janeiro, Nova Aguilar, 1998
- NERUDA, Pablo, *Confieso que he vivido: memórias*, Santiago, Pehuén, 2005

NERUDA, Pablo, *Obras Completas*, vol. I-II, Barcelona, Galaxia Gutemberg / Círculo de Lectores, 1999

PAULA, Marcelo Ferraz de, "Neruda no Brasil; o Brasil em Neruda" in: *Caderno de Letras da UFF*, no. 38, 2009

ネルーダ、パブロ『ネルーダ回想録 わが生涯の告白』本川誠二訳、三笠書房、一九七六年

ネルーダ、パブロ『ネルーダ詩集』田村さと子訳編、思潮社、二〇〇四年

ネルーダ、パブロ『ネルーダ詩集』大島博光訳、角川書店、一九七二年

Another postman of Pablo Neruda

FUKUSHIMA Nobuhiro

Brazilian poet Vinicius de Moraes, well known as the poet of Bossa Nova and generally taken as an apolitical intellectual, as he himself wished, in truth, had kept a strong interest in the political situations from the Vargas Era in 1940s to the Military Regime in '60s and '70s and continued writing "engaged" poems throughout his life. In this paper, to focus on this less known aspect of Vinicius, we try to trace how this Brazilian poet had been influenced by the world-famous Chilean poet Pablo Neruda and how the two poets cultivated their friendship.